

初年次科目「思考技術基礎」の特色と課題 —他大学の類似科目との比較から—

福 博充ⁱ 関田 一彦ⁱⁱ

創価大学 総合学習支援センターⁱ

創価大学 教育学部ⁱⁱ

キーワード：思考技術基礎、読解力、初年次教育、クリティカルシンキング

Keywords: Training Course for Thinking Skills, Reading Skills, Education for First-Year Students, Critical Thinkings

1. はじめに

2018年度のカリキュラム改訂に際し、前年の2017年からの試行を経て、創価大学の共通科目に「思考技術基礎」が開講して4年が経つ。書く力の育成に力点を置く初年次必修科目「学術文章作法Ⅰ」を補完しつつ、書く力に対しては読む力の育成を重視し、思考を促進する技術やツールのいくつかを体験的に学ばせることで、大学での学習を効率的・効果的に行う学習者の育成を願った科目である。

学術文章作法Ⅰとの関係については2019年の大学教育学会課題研究集会で発表しているが(福・関田2020)、2022年度に予定される共通教育のカリキュラム改訂を見据え、改めてこの科目自体の特色を確認した上で、特長と課題を整理・検討しておきたい。まず、昨年度からこの科目を担当している第一筆者が授業概要を説明し、続いて、「思考技術基礎」を設計した第二筆者から聞き取った科目開設の背景をまとめる。次に科目の特長を明らかにするために、他大学では広く採用され、本科目と趣旨が類似す

る「クリティカル・シンキング」科目との対比を行う。最後に、対比を通じて本科目の独自性を検討する中で顕れる課題を整理し、今後の対応について述べる。

2. 創価大学「思考技術基礎」の概要と特色

2-1 授業の目的と方法

「思考技術基礎」は特定の学問体系に沿って系統的な知識を習得するのではなく、知識や情報を自らに関連づける力を伸ばし、学生たちに複数の思考ツールを活用することで“思考技術”を磨く必要性や有用性に気づいてもらうことを目的にしている。具体的な到達目標として次の5つがシラバスに示されている。これらは開講以来一貫して掲げられているものである。

1. 活字媒体における相手の主張をきちんと理解し、自分の言葉でそれを表現できる。
2. 断片的な情報を関連づけ、自らに意味のあるものとして受容できる。
3. LTDの作法を体験的に理解し、他の学習場面にも応用できる。
4. 様々な思考ツールを学び、他の学習場面

への応用を試みることができる。

5. 対話的な学びを通じて学友の学びに貢献できる。

この科目では、上記の目標達成に向けてLTD（Learning Through Discussion：話し合い学習法）と呼ばれる協同学習法を学習活動の中核に据えている。LTDとは事前に指定された文献を読み、指定された手順で自らの理解を予習ノートにまとめ、そのノートを使ってグループで話し合い、文献の理解を深め合うという学習手法である（安永・須藤 2014）。予習段階では①課題文の全体像がわかるまで何度も繰り返し読み、②わからない言葉の意味を調べ、著者がその言葉を用いている意味に対して理解を深める。その上で、③著者の主張や、④主張に関連した話題を特定・整理する。ここまでで課題文の内容を適切に把握したとして、さらに⑤既習の知識と課題文の内容とを関連づけ、⑥その学びの意義を自身に則して価値づけ、最後に⑦課題文に対して建設的な助言を考えるというプロセスで予習ノートを作成する。話し合う際には予習ノートに対応する形で①雰囲気づくり、②著者の言葉の意味に対する理解、③主張の理解、④（主張に関連した）話題の理解を深め、⑤既習知識や⑥自己の価値や意義との関連付けを共有、相互に確認し、⑦課題文に対する評価をしたあと、⑧自分たちの話し合いはどうであったかを振り返り、次回の目標を考えるという手順（ステップ）を示し、クラスの仲間との教え合いと学び合いを通して、課題文献を深く読み解く訓練をしている。協同学習を採り入れることで、学生に「対話的な学びを通じて学友の学びに貢献」する機会を提供し、認知的スキルだけでなく、非認知的スキルの育成を視野に入れているところは特色の一つである。

2-2 授業計画及び評価方法

「思考技術基礎」の2020年度秋学期の授業計画を表1に示す。毎回の授業における提出課題

及び授業内で実施する小論文の点数によって到達目標の達成度合いを評価している。なお、2020年度に関しては春・秋学期ともに全て遠隔授業（ZOOMを利用したリアルタイム授業）を行っている。LTDの課題文献については【参考資料】として稿末にリストを示す。

特色の二つ目に、初年次科目として新入生の学習習慣の形成促進を意図した授業計画を組んでいることが挙げられる。予習及び復習を中心とした学習習慣の形成を図るため、毎回なんらかの予習課題を課し、計画的な取り組みが成績に反映するように配点を工夫している。特定のディシプリンに捕らわれない科目の性格上、きちんと“トレーニングメニュー”に沿って学習を進め、学習習慣を身につけられるかどうか、評価のポイントになっている。

また学生同士の対話的な学びを具現化するため「学び始めシート」「対話ジャーナル」「中間振り返りシート」「リフレクションシート」を課題とし、「主体的・対話的な学び」を促進する相互評価の機会を提供している（関田・森川 2019）。互いに仲間の学習の深化や進展を確かめ合い、促し合う中で進む振り返りは、自己評価を促進し、主体的に学習に向きあおうとする気持ちを高めてくれる。こうした自他の成長変化について交流し合う仕組みが組み込まれている点も特色であろう。なお、思考技術は個人スキルと見なされがちだが、協働する仲間との対話的な学びを効果的に行うグループ活用スキルも思考技術として捉え、この科目でLTDを行う意義の一つとしている（福・関田 2020）。

2-3 「思考技術基礎」開講の背景

次に、「思考技術基礎」が開講された背景について科目担当者である第一筆者が、科目設計者である第二筆者から聞き取った話をもとに以下の4つに整理する。この科目が「創価大学の共通科目」として、すなわちローカルニーズに対応して構想されたことが判る。これも特色の一つであろう。

（１）学生の読解力の低下

「思考技術基礎」が本学の初年次科目として開講された背景として、まず全国的に大学生の読解力が低下していることが挙げられる。15歳児を対象とした OECD の「生徒の学習到達度調査2018年調査（PISA2018）」でも、読解力が2015年の調査に比べ有意で低下していることが指摘されたことは記憶に新しい。現に中学・高校においても教科書を「見て」はいるものの、その意味を理解して「読んで」いない生徒が少なくないことが指摘されている（新井 2018、2020）。こうした状況は大学生についても同様であり、書く力の育成の以前の問題として、課題の指示が正確に理解できない学生も確認され

ている。初年次の必修科目である「学術文章作法Ⅰ」では、書く力とともに文献読解のトレーニングをしてはいるものの、書く力の習得に重点がおかれているため、半期15回という限られた授業時数では「読む力」の育成に十分な時間を確保することは難しい。そこで、仲間とともに課題文を深く読み解く LTD を中核に据えることで、読む力の鍛え直しの機会としている。

（２）PASCAL 入試の導入

創価大学では、LTD によって鍛えられるコンピテンシーを全学的に重視していることも科目を設置した背景として挙げられる。本学では、2018年度（平成30年度）入試から、新たに

表 1 2020年度秋学期の「思考技術基礎」授業計画

	学習活動	次回までの課題
1	オリエンテーション（シラバス説明・学習の動機づけ）	学び始めシート プリント予習シート
2	チームビルディング /LTD 手順説明	LTD 予習ノート 1 対話ジャーナル 1
3	LTD 1（安永文献）	LTD 予習ノート 2 対話ジャーナル 2
4	LTD 2（名古屋文献）	LTD 予習ノート 3 対話ジャーナル 3
5	LTD 3（東谷文献）	対話ジャーナル 4
6	マインドマップの説明及び作成	対話ジャーナル 5
7	マインドマップの応用	中間振り返りシート 対話ジャーナル 6
8	中間振り返り / チームビルディング / 6つの帽子思考法（説明）	対話ジャーナル 7
9	6つの帽子思考法（実践）	対話ジャーナル 8 LTD 予習ノート 4
10	LTD 4（東谷文献）	対話ジャーナル 9 LTD 予習ノート 5
11	LTD 5（荻谷文献）	対話ジャーナル10 LTD 予習ノート 6
12	LTD 6（荻谷文献）	対話ジャーナル11 LTD 予習ノート 7
13	LTD 7（今井文献）	対話ジャーナル12
14	授業内小論文	学習ポートフォリオ リフレクションシート
15	期末振り返り	

PASCAL (Performance Assessment of Students' Competency for Active Learning) 入試を導入している。その名の通り、アクティブラーニングを行うための学生のコンピテンシー(行動特性)を、そのパフォーマンスによって評価する AO 入試であるが、その際のグループワークは LTD 方式で行っている(関田 2019)。評価者は、受験生がどのように主体的に自分の意見を表現し、また他者の意見に接してどのように教材への理解を深めていくかなどを観察しつつ、一人一人の主体性、協働性といった能力・資質を、ルーブリックを使って評価する。こうしたコンピテンシーは本学が育成を目指す「創造的人間」の重要な要素である。LTD は一部、学部の初年次セミナーでも導入されているが、PASCAL 入試以外の入試区分で入学した学生に対しても、こうした主体性や協働性といったコンピテンシーを鍛える場を提供することも本科目設置の背景として挙げられる。

(3) 国際バカロレアスコアを活用した公募推薦入試の導入

また、創価大学がスーパーグローバル大学創成支援事業採択に伴い、国際バカロレアスコアを活用した学部の公募推薦入試を2018年から始めたことも「思考技術基礎」が開講された背景の一つであった。国際バカロレアとは、スイス・ジュネーブにある国際バカロレア機構が提供する総合的な教育プログラムのことである。2020年6月30日現在、日本には159の認定校がある(文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム 2020)。国際バカロレアが提供する教育プログラムは、批判的思考力を育む「知の理論(TOK)」に基づき、早い段階から思考力を伸ばす取り組みを行っている。日本ではまだ知識偏重、暗記重視の「勉強」に重きを置いている高校も多く、国際バカロレアスコアを活用して入学した学生とそれ以外の学生との間には、思考技術の面で差が生じる恐れがある。一般の学

生にも思考する訓練の場を設け、思考する素地を養っておくことは、国際バカロレア修了生とも学び合うための準備となる。(ただし、バカロレア修了生の入学がほとんどないことから、「知の理論」とのつながりを意識した内容は現状では扱っていない)。

(4) 初年次セミナーの補完

創価大学の初年次教育科目では、①学習習慣の確立・学習スキルの習得、②大学への適応促進・人間関係づくり、③学習意欲の向上の3つの学習成果を意図した取組が求められる。各学部によって運営されている初年次セミナー(理工学部は初年次プロジェクト)は初年次第1セメスターの必修科目であり、本学における初年次教育の中核であるが、半期のみの初年次セミナーだけでこうした学習成果を達成することは難しい。そこで初年次セミナー以外に複数の科目を初年次教育科目として共通科目に用意することで、どの学部の新入生も同じ学習成果を意図した学習活動に取り組む機会を持つことができる(関田 2018)。「思考技術基礎」はそのうちのの一つとして位置づくが、初年次教育科目としては特に、①学習習慣の確立・学習スキルの習得を目指すべき学習成果としている。

3. 「クリティカル・シンキング」と「思考技術基礎」

多くの大学では今、クリティカル・シンキング(批判的思考)あるいはロジカル・シンキング(論理的思考)と呼ばれる思考力の育成を図る科目を開講している(若山ほか 2014、久保田・池田 2015)。科目として独立しないまでも、初年次セミナーなどの一部で扱うケースも多く、講師や講座を外注しているところさえある。これは1990年代から顕在化してきた学生の(学力の)多様化の進行への対応とみられる。1998年の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」には、「入学後は必要に応じ学生の履修歴等に対応して大学

教育の基礎を教えるなど、学生に対するきめ細かな配慮や様々な工夫が必要」との認識が示されている。学ぶ力、考える力といった大学教育を受ける前提となる基礎力の増強が21世紀の大学教育の課題となるという“ご宣託”であった。

すでに20年近く前に京都大学の品川（2002）は「大学教育のなかで、論理をたどって文献を読解する力、根拠をあげて主張を展開する文章作成能力が学生のあいだで著しく落ちてきている（p.4）」として、「論理的な思考力および表現力（p.4）」の育成あるいは開発の必要性を認め、「そうした思考訓練は教養教育、大学教育のなかにとりいれねばならない（p.9）」と述べている。その上で、「大学によってはまだ専門課程の専攻の決まっていない学生に対して、どの専攻に進むにしても役立つ思考訓練、たとえば、資料を論理にしたがって解釈し、資料から得たことを根拠として自分の主張を組み立て、発表し、質問をうけて、根拠を示して説明するといった習慣を身につけさせなくてはならない（p.9）」とし、ディシプリンよりスキル育成を目的とした教養科目として、「クリティカル・シンキング」を位置付けている。（以下、科目名として示す場合には「クリティカル・シンキング」とし、批判的思考という意味ではCTと表記して区別することとする。）

3-1 龍谷大学「クリティカル・シンキング」の概要

ここで本学の思考技術基礎とほぼ同時期に構想・開講された龍谷大学の「クリティカル・シンキング」を例に、「クリティカル・シンキング」系の科目と「思考技術基礎」の簡単な対比を試みたい。龍谷大学は2015年度から「クリティカル・シンキング」を開講しているが、それに向けて全国の大学で取り組まれている「クリティカル・シンキング」系科目について調査を行い、報告書にまとめ、成果を公表している（竹内・谷本 2014）。以下、その報告書と現在公開されている2020年度のシラバスを参考に、科目

の概要を述べる。

龍谷大学の「クリティカル・シンキング」は「文章（議論）を論理的に分析する能力、その内容の妥当性を批判的に考えるための能力を身につける」ことを講義の到達目標とし、シラバスには次のような概要が示されている。

大学での学びでは、単に講義内容を理解しておぼえるだけでなく、問題を批判的に考え、探求していくことが大切である。そのために必要となるのが、論理的・批判的な思考力「クリティカルシンキング」である。論理的に分析する方法や、その内容を批判的に考えるための方法を学ぶ。具体的な素材を使って演習形式で訓練しながら、論理的・批判的に読み・考え・議論するためのスキルを身につける。

文章を論理的に分析し、その内容を批判的に考える能力の育成に向けた「クリティカル・シンキング」の講義計画は表2の通りである。講義は演習形式で開講し、授業の最後にその回議論した内容について問題を出し、解答してもら

表2 龍谷大学2020年度後期「クリティカル・シンキング」の講義計画

	学修内容
1	イントロダクション（議論の識別）
2	理由と結論
3	理由の構造
4	暗黙の前提
5	理由と推論
6	論理の正しさ
7	蓋然的な議論
8	原因と結果に関する思考
9	論理的な誤り
10	理由の検討
11	理由の正しさ
12	実際の議論の分析と検討
13	批判と反論
14	批判的な思考法
15	まとめと演習

うと示している。また、評価については発言、発表の状況及びミニレポートの提出による平常点が50%、定期試験を50%と明示している。あわせて、当該科目を開講する際に参考としたアレク・フィッシャー（2005）『クリティカル・シンキング入門』（ナカニシヤ出版）を教科書とし、訳者の一人である岩崎が本科目を担当している。論理的な分析や批判的な思考を可能にする要素を一つの教科書をもとに系統的に学んでいくスタイルである。

3-2 「クリティカル・シンキング」と「思考技術基礎」の異同

龍谷大学で当該科目を担当する岩崎（2002）は、CTを「『絶えずあらゆる意見に疑いを持ちながら、冷静にそれを検討し、多くの意見の中から取るべきは取り、否定すべきは否定して、正しい考え方をしていこうとする態度』である（p.18）」と捉える。その上で、態度としてのCTを伸ばす議論（argument）の要点を2つ挙げている。「まず、議論をしっかり同定すること、つまり、理由と結論がどこかをはっきりさせることから始める。そもそも、理由と結論がないものは、単なる記述か、主観的な好みの表明となり、検討に値しない（p.24）」という。そして「次に、理由が受け入れられるものか、その理由となっているデータ等は信頼できるのか、別の理由はないかなど、理由の検討が必要となる（p.24）」という。授業計画の中で「理由」について様々な学び考える授業回が数多く設定されていることから、argumentを重視する彼の姿勢が伝わってくる。

一方、LTDにおける「話し合い」はargumentより広い意味のdiscussionであるが、岩崎（2002）の示すargumentの要素も含まれている。LTDのステップ②ではまず、議論の同定という作業の前に、まずそこで語られる言葉の共通認識（意味の同定）が、「語彙調べ」という作業によって図られる。その上で結論と理由の同定が、「主張の理解」と「話題の整理」

という形で行われる。LTDのステップ③と④では、主張の理解や話題の整理において、読み手の主観（思想的嗜好など）を極力排し、書き手の考えに沿った理解や整理が求められる。つまり、LTDのステップ②～④は、CT育成で重視するargumentの基になる同定作業と類似した思考訓練を行っているといえよう。

その上で、一般に想定されるCT訓練では、主張の吟味（取捨選択）の徹底に向かうが、LTD後半のステップでは関連づけという作業を通じて、読み手自身の内省へと向かう。LTDは学習活動であるから、対象とした文献をクリティカルに理解した結果として、どのような知識・理解が自らに生じたのか言語化することが求められる。さらに、そうした知識・理解が自身にとってどのような意味があるのか、自身の価値観に照らした評価・意義付けが期待される。その上でステップ⑦に至り、課題文を評価し、批判的あるいは建設的な提言を行うことになる。

授業概要のはじめに「大学での学びでは、単に講義内容を理解しておぼえるだけでなく、問題を批判的に考え、探求していくことが大切である」と謳っていることからわかるが、この「クリティカル・シンキング」は大学教育の基礎となる思考力育成を念頭に置いている。一方、「思考技術基礎」はより深い読解のための思考訓練を意図している。単に教科書（文献）の内容を覚えるだけでなく、その記述を批判的に読み解き、自らの学びを深めていくことを大切にしている。どちらも大学教育の基礎づくりを目指しているところでは同じでも、鍛える能力は少し異なっているようである。

3-3 「思考技術基礎」の課題

「クリティカル・シンキング」との対比によって、「思考技術基礎」の課題（あるいは改善の余地）もまたいくつかが明らかになった。LTDという協同学習の手法を用いている点は「思考技術基礎」の特色の一つと考えるが、「論

理をたどって文献を読解する」ためにLTDという学習法を最大限活用できているかという点には課題がある。

今の思考技術基礎は、「LTDの作法を体験的に理解する」ことを到達目標の一つにしている。これは初年次科目として、大学において期待される予習の仕方や文献読解の姿勢を学び、実際に身につけることを意図しているからである。しかしながら、LTDの前半ステップ②～④では、単に体験的「理解」に止まらず、それぞれ大学生に必要な学習技能をより明示的に訓練することができるはずである。

そもそも、思考技術基礎は「読む力」の育成を念頭に設計されている。一口に「読む」といっても、リーディングスキル（読み方）としては、エクステンシブ・リーディング（速く読み、大まかに内容を把握する）とインテンシブ・リーディング（精読し、文章を丹念に読み正確に把握する）に分けられる。さらに、エクステンシブ・リーディングでは、文献全体にざっと目を通し、その文献の内容を大雑把につかむスキミングと特定の情報に狙いを絞って文献から見つけ出し、重点的に素早く読むスキヤニングと言われる2つのスキルが重視されている。ステップ②の語彙調べはスキヤニングの、ステップ③と④はスキミングの練習になるはずである。ステップの説明をする際、この2つのスキルはきちんと教示すべきであろう。

さらにステップ③と④では、CTを鍛えることをねらいとすることもできる。著者の主張やその主張のために著者が用いている根拠の同定と検証を学生に求めることで、argument力を鍛えることも可能と考える。その際は、インテンシブ・リーディングの中でも重視される、クリティカル・リーディング（注意深く分析的に読む）の説明に一定の時間を割くことが必要になる。標準的なLTDではステップ②～④に合わせて20～25分程度しか割り振られないが、クリティカルリーディングの練習と位置づけ、配分時間を増やすことも考えられるだろう。

関連して、LTDのステップ⑦では作品（文献）に対する批評を行う。通常は数分という短い時間しか与えられないが、LTDの終盤になってはじめて著者の主張や論理を批判することが許される。もし、思考技術基礎の中でCTを今まで以上に鍛えようとするれば、前半のステップだけでなく、ステップ⑦の時間増も検討すべきであり、LTDの標準的な時間枠を崩す必要が生じる。

思考技術基礎はLTDを中心に設計されている。LTDの教育効果として読解力あるいは文献理解度の向上が挙げられるが（安永・須藤2014）、いつまでもLTD自体の効力に満足してはいけな。思考技術基礎という科目の中で使う以上、そこには、通常の（標準的な）LTDでは到達しがたい学修成果が期待される。今までの成果に加え、「クリティカル・シンキング」系科目に匹敵するようなCT能力の向上が見られるとすれば、それはこの科目の魅力であり、特長となろう。

4. 課題再考：「思考技術基礎」の特長

大学での学びに必要な基礎としてCTが注目されてきたが、そのための「クリティカル・シンキング」科目と「思考技術基礎」を対比し、「思考技術基礎」の課題（改善の方途）を検討した。ここで、協同学習としてのLTDの効用という視点から、前述の課題について再考しておきたい。

本年の大学教育学会課題研究集会課題研究シンポジウムⅠの指定討論者、山地が発表者である杉谷に向けたコメントが興味深い（注1）。杉谷が自身の授業（基礎演習）におけるライティング指導に関して、リーディングスキル指導を合わせて行う必要性を語ったのに対し、山地は「インプット部分が脆弱であり、読むことや読んで考えることが不足している以上に、言葉と丁寧に関わりながらコミュニケーションをすることの喜びや、それへの信頼が希薄になって

いないだろうか。少しでも関心のあるものを味読したり自由に言語表現してみたりする体験が前提のようにも思われる（「基礎演習」の中だけでは難しいが）」と指摘している。この指摘をどう解釈するか様々だろうが、「言葉と丁寧に関わりながらコミュニケーションをすることの喜びや、それへの信頼が希薄」ではないか、という問題提起は argument を介した CT 訓練の課題あるいは弱点を露わにしているように思われる。

クリティカルに読み解くスキルは大学教育には欠かせないものであるが、正確に読むことに注意が向くと、論旨の曖昧さや言葉の多義性に否定的な（あるいは粗さがしの）スタンスになりやすい。一方、対話的なコミュニケーションにはそうした曖昧さを拒絶するのではなく、双方向で確かめ合うスタンスが求められる。そのやり取りが相互理解の手応えを生み、対話する楽しみや喜びに導いてくれる。「クリティカル・シンキング」が argument スキルに焦点化する傾向があるとすれば、LTD をベースとする思考技術ではコミュニケーションの喜びを内包する discussion を基調にしている。換言すると、CT の技能養成にこだわりすぎると、LTD の善さを損なうリスクがありそうである。

そう考えると、LTD を CT の育成に用いることより、LTD の特長である関連付けの発展あるいは深化に向けた改善の方途を探ることが大切に思われる。ステップ⑤では文献から新たに学んだことと、既習事項を関連づけることで知識構造を広げる、あるいは再構成を促進することが意図される。これはディシプリンベースの専門科目においては重要なことである。新しい知識が意味あるものとして受け入れられるほど、その専門領域の理解は確かになっていく。ただし、思考技術基礎は特定の教育内容を知識として学ぶのではなく、課題文の主張や根拠を論理にしたがって理解した上で、知識や情報を関連づけて読解する力を伸ばすことを目的にしている。したがって、ステップ⑥で行う自己と

の関連付けがより重要になる。今行われている LTD では、教材と自分との関連付けを学生同士が共有することを通じて、教材への関心が高まり、味読が促されている。この体験をもう一段深め、学習したものが自身に与えた影響を自覚するところまで関連付けを進めたい。そこで、の気づきが、その学びをどう生かすかという意思を生み、クリティカルに読み、考える動機づけとなっていく。畢竟、ステップ⑥を軸に思考技術基礎に特化した LTD の開発が必要であり、それがこの科目の特長となっていくと思われる。

5. おわりに

本稿では「思考技術基礎」の特色を確認した上で、本科目と趣旨が類似する「クリティカル・シンキング」科目との対比から本科目の改善方向について検討した。具体的には、LTD という協同学習を用いて学生（とくに初年次学生）の読解力の向上を目指す中で、CT を鍛えることをより強く意図するならば、どのような工夫が必要か、いくつかの提案を行った。と同時に、LTD の特長を生かすことで、自らの内に育まれている CT スキルに気づき、それを用いて学習を進めようとする態度形成を促す可能性あるいは重要性を指摘した。

その上で、今後の課題として、CT 訓練を意図した授業デザインの改良・開発自体もさることながら、この科目の教育効果の検証が挙げられる。本科目が思考技術（スキル）を磨くことを目的にしている以上、習得したスキルを学生は他の学習場面でどのように応用しているのか、学習成果の転移の実際を検証する必要があるだろう。学生の思考力は一科目で育成できるものではなく、大学全体の教育力によって左右されることが示唆されているが（久保田 2010、関田・須藤 2019）、検証のプロセスを通じて、大学全体の教育力における本科目の位置も再確認できると考える。2022年度の共通科目のカリ

キュラム改訂に際し、特色をいかしつつ、大学4年間の学びに向けて本科目がどのような「入口」であるべきか、引き続き模索していきたい。

注1：2020年11月28日（土）にオンラインで開催された2020年度大学教育学会課題研究集会シンポジウムⅠ「課題研究シンポジウムⅠ：学生の思考を鍛えるライティング教育の課題と展望」での発表。

【参考資料】

2020年度（春・秋学期）にLTDで扱った課題文は下記の通りである。本科目の目的である大学での学習を効率的・効果的に行う学習者を育成するため、大学での学びあるいは学び方に関連する課題文献を指定することで、学習内容の体験的な理解を図っている。

- LTD1：安永悟（2014）「大学での学び方」『LTD話し合い学習法』ナカニシヤ出版，pp.147-148
- LTD2：名古屋隆彦（2017）「何のために学ぶのか」『質問する，問い返す』岩波書店，pp.52-77
- LTD3：東谷護（2017）「思考の準備」『大学での学び方』勁草書房，pp.13-30
- LTD4：東谷護（2017）「『読む』ことから問う」『大学での学び方』勁草書房，pp.31-54
- LTD5：荻谷剛彦（2002）「問いを立てる」『知的複眼思考法』講談社，pp.176-197
- LTD6：荻谷剛彦（2002）「知ることと考えること」『知的複眼思考法』講談社，pp.48-60
- LTD7：今井むつみ（2016）「知識観について」『学びとは何か』岩波書店，pp.144-168

引用・参考文献

- 新井紀子（2018）『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社
- 新井紀子（2020）：AI時代の高大接続改革—読解力調査から見る今の高校生・大学生—，大学教育学会誌、41（2）、p.2
- 大学審議会（1998）：21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学（答申）、文部省、https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm（国立国会図書館 2019.6.2保存）
- 福博充・関田一彦（2020）：〈課題研究シンポジウムⅠ〉ライティング科目と連携する科目の設計「初年次科目『思考技術基礎』の実践から」、大学教育学会誌、42-1、27-30
- 岩崎豪人（2002）：クリティカル・シンキングのめざすもの、京都大学文学部哲学研究室紀要：Prospectus、5、12-27
- 久保田祐歌（2010）：どのような授業でクリティカルシンキングを教えられるか、名古屋高等教育研究、10、253-266
- 久保田祐歌、池田史子（2015）：大学教育におけるクリティカルシンキング—育成課題の検討—、名古屋高等教育研究、15、139-160
- 道田泰司（2012）『最強のクリティカルシンキング・マップ』日本経済新聞出版社
- 文部科学省IB教育推進コンソーシアム(2020)：IBとは <https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/>
- 品川哲彦（2002）：教養教育カリキュラム改革の動向—critical thinkingが授業として期待され、意味をもつ—要因—、京都大学文学部哲学研究室紀要：Prospectus、5、1-11
- 関田一彦（2018）：創価大学の初年次教育—初年次教育推進室開設の背景と取組—、学士課程教育機構研究誌、7、19-23

- 関田一彦（2019）：LTD と大学入試—創価大学
PASCAL 入試の取り組み—、協同と教育、
15、145-152
- 関田一彦・森川由美（2019）：主体的・対話的
で深い学びを促す振り返り：協同教育の視点
からの一考察、創価大学教育学論集、71、
243-258
- 関田一彦・須藤義男（企画）（2019）：初年次教
育における思考力育成の必要性和課題：民間
サービス提供結果からの考察、初年次教育学
会第12回大会発表要旨集、32-33
- 竹内綱史、谷本光男（2014）：「クリティカル・
シンキング」に関する科目の設置に向けて、
2014年度龍谷大学教養教育・学部共通コース
FD 研究開発プロジェクト報告書
[https://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd_
project/data/2014-1.pdf](https://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd_project/data/2014-1.pdf)
- 若山昇、梶谷真司、渡辺博芳、赤堀侃司（2014）
クリティカルシンキング教育の現状と課題—
大学における授業実践者の視点から—、帝京
大学ラーニングテクノロジー開発室年報、
11、85-94
- 安永悟・須藤文（2014）『LTD 話し合い学習法』
ナカニシヤ出版